

岡本真氏と藤村龍至氏の対話

藤村龍至氏(東京藝術大学准教授)

岡本真氏(アカデミック・リソース・ガイド株式会社 代表取締役) レクチャー講師



藤村 みなさんこんにちは、東京藝術大学の藤村です。今日は色々な状況がありまして、いつものパブリックミーティングという形ではなく映像で対談を収録させて頂き、皆様にご意見を頂きたいと思い、このような動画を作成いたしました。今日お迎えいたしますのはアカデミック・リソース・ガイドの岡本さんです。

岡本 こんにちは岡本です。アカデミック・リソース・ガイドという会社をやっています。この会社は分かりやすく言えば図書館や美術館、博物館といった公共の文化施設のデザインやプロデュースを手がける会社で、千葉県内でも松戸や、柏、成田、東庄といった沿線エリアで仕事をさせて頂いています。

ちょうど開館して丸1年経ったところですが、福島県の須賀川市というまちで作った「須賀川市民交流センター tette」が、この数年の中でも大きく、同時に注目の仕事です。

藤村 『すかがわ、めぐるめぐ』という冊子をいただき拝読させて頂きました。須賀川市民交流センターは、東日本大震災の後の震災復興の流れの中で企画された公共施設です。この冊子データはweb上にありますので皆様にはインターネット等で見ていただければと思います。こちらの施設の概要ですが、どういう機能が入っているのでしょうか。

岡本 大きな複合施設として、図書館、公民館的な機能、子育て支援の機能、そしてコンビニ、カフェが入り、チャレンジショップという市民の方による小さな店のコーナーがあります。そしてウルトラマンやゴジラを作られた円谷さんのご出身地ということもあり、円谷さんを記念する特撮ミュージアムが入っています。規模感が分かりづらいかもしれませんが、全体で13,000㎡以上という非常に大きな施設です。





藤村 この施設自体は市役所と同時にプロポーザル(=企画提案)でプロジェクトがスタートしたということで、だいたい何年ぐらいに計画がスタートして、どれくらい期間をかけて開館まで準備されたのでしょうか。

岡本 実際に計画が具体的に動き出したのはだいたい2013年ぐらいからですので都合6年ほどかかってできました。市役所が少し先に完成しています。市役所と市民交流センターtetteは非常に近くて、歩いて5分ぐらいのところですよ。どちらも市民の方々にとってはここまで復興してきたことを実感するような施設になっています。

藤村 印象的なのは震災復興のプロジェクトだったということが大きいと思うのですが、たまたま東日本で最大級の揺れ被害を受けられて、庁舎からありとあらゆる公共施設が被害を受けてしまった。全部を震災復興で作り直すことになって、庁舎とこの市民交流センターがある距離をもって、まちの中心部に2つ同時に再建築されることになった。

その過程で市民交流センターの議論とそして庁舎ができて、この施設単体の、市民交流センターの図書館だとか色々な機能をもった、いわゆる「複合建築」、そして岡本さんの言葉で言う、目標とされている「融合」された建築としての公共施設と、それから庁舎=市民サービスのヘッドクォーター機能(=災害時の司令塔機能)みたいなものが同時に立地したと。



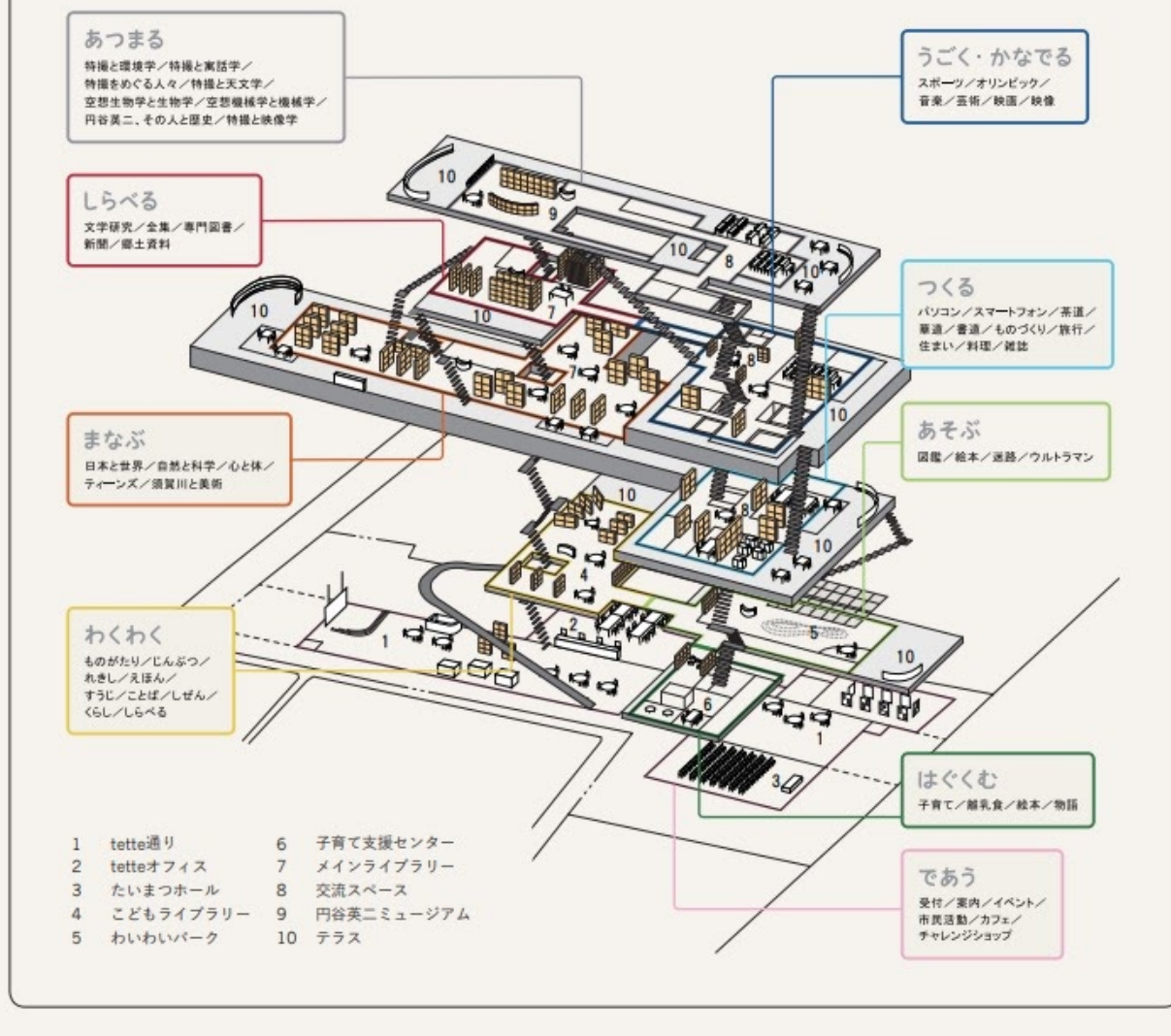
そういうことを一度に経験できる自治体はなかなかないと思うのですが、この中で、須賀川市と松戸市は置かれている状況も違いますし、規模も違いますし、文脈が色々異なるところがありますが、公共施設を一体的に作り直して中心市街地のまちづくりをリニューアルしていこうという大きな目標そのものは、今回のMATSUDOINGで考えようとしていることと重なる部分も多いかと思しますのでその辺りのポイントを伺えればと思います。

まず、いわゆる機能の「複合」と言われる色々な施設がひとつの建物に入っている公共建築と、岡本さんが仰る「融合」ということは、どういふふうに違うのかというところを教えてくださいませんか。

岡本 全ての複合施設がダメなわけではないのですが、往々にして複合施設というのは単なる雑居ビルみたいなものだ、と我々は呼んでいます。上は何をやっているかわからない、下は何をやっているかわからない、あくまでそのフロア別に機能が完全に分断されてしまっている。

融合

STEP4 フロアに9つの活動を振り分け！



それに対して我々が理想とする状態をあえて「融合」という言い方をしているのは、フロアで機能が分かれていてもいいのですが、ちゃんと繋がりを持っていく、お互いに関わり接点を持っていく、関わり合いがある、インタラクション(=相互作用)がきちんと発生するものを融合施設と捉えています。特に使い方が重なり合っていたり、重ね使いされたりするようなものが本来望ましいと思っ
ていまして、須賀川で実際に取り組んだことは、フロアで分けるのではなく、機能や働きでそのフロアに何を配置するかを決めたことが良かったと思っています。

須賀川では建築家が最初に提案した部分ではありますが、例えば音楽を演奏できる音楽スタジオを作るのであれば図書館の音楽関係の図書はその近くに置く。図書館が何階にあるからこの本はこっこのフロアになきゃいけない、という考え方をせずに、活動に対してそれぞれの機能を寄せて置いていく、集めていくという考え方をして実際に実現してきました。こういった活動に寄せて様々な諸機能を集めてくるというのは、融合施設の大きな狙いやコンセプトになると思います。

藤村 ざっくり言うと色々な機能をシャッフルしていく。通常だと整然と何階に図書館があります、何階に美術館があります、何階に庁舎がありますとか、色々な公共施設が近くにあったとしてもそれらが整然と床で分けられてしまうのですが、須賀川では床自体が縦横無尽に重なっている
ので、その重なりが崩れることによって交流が生まれるという特徴があります。

それはもともとプロポーザルの時に建築家が意図してそういう空間を提案されたのだと思うのですが、運営上、建築家の提案通りに運営がなされないことも多いと思います。tetteの場合はどのようにそれを克服していかれたのでしょうか。

岡本 そこが最もチーム全体で、建築家も含めてみんなが一番気にした部分と一番力を入れた部分です。仰るようにコンセプトは良くても実際の運営において、機能が融合するか混ざりあうかということは全く果たされないことも多いです。そういったことに関して、似たような考え方に基づいて取り組まれている様々な施設を実際に訪問し、裏話みたいなことも聞きながら非常に研究をしました。

その中でわかってきたことが、運営に関しては完全に一体化、一本化しなくてはいけない、という考え方が大事であるということです。特に須賀川が明確にサンプルとして、非常に優れた前例として意識しているのは長野県の塩尻市にある「えんぱーく」という施設で、えんぱーくに学んだことが非常に大きいです。施設全体の「センター長」という人を置き、その人がその施設、そして周辺のまちとのつながりに対して全責任をきちんと負う。



須賀川のtetteでも市民センター部という部を設置してもらい、その部にtetteの中に入っている全部署が組み込まれる。そして市民センター部長=センター長のもと全員が同じ意識を持って同じ方向を見て仕事をしていく、この原則を作れたことが非常に大きいです。

藤村 須賀川の場合、館の中がシャッフルされて市民交流センターとしての新しい像を示したと思うのですが、庁舎と合わせて市民交流センターができたことによって、公共施設がまちの中でインパクトを作ったのかなと思います。岡本さんが松戸の中心部を見渡した時に、松戸の中心部も市民会館や図書館とかいくつかの公共施設があって、それはいわゆる文化系の施設もあれば、庁舎のような、いわゆるヘッドクォーターのような機能もあると思うのですが、そういう色々な施設があって、それらを仮にシャッフルしたり、何か組み替えていったりする時にどんなコンセプトが考えられるとお考えでしょうか。

岡本 松戸を実際訪れてみて、特に松戸駅の東西を両方見て感じる中で言うとまさに先ほどの須賀川の話に繋がるのですが、箱で分けるというよりは、機能、働きで分けるということの方が大事だと思います。分けるというよりは「まとめる」と言った方が良いと思うのですが、特に市民の方の目線を見た時に何と何がくっついたほうが本来的に便利なのか、ということが非常に重要なことだと思います。どうしても箱で考えると、役所という建物があり、役所にはこういうものが入りませんが、須賀川市民交流センターであれば市民交流はこういうものが入ります、というように箱で考えてしまうのではなく、「市民の皆さんが何をしたいのか」という「wish」の部分から入って、機能の再編を考えていく必要があると思います。

藤村 色々な人の「wish=何がやりたいのか」を集めるということがあって、MATSUDOING2050というこのワークショップは、「わたしがつくる！まつどのみらい」というテーマを掲げていて、個々の「wish」のようなものから松戸の未来を考えて、それを実現するプロセスの中でまちづくりも考えていこう、という趣旨がありました。

これまで今回を含めて6回の意見交換の機会があって見えてきたことは、ひとつには西側に豊富な歴史的な蓄積があって、多くの人が魅力を感じています。東側に豊富な公共の用地があり、そこにこれから発展する可能性、余白のようなものがありそうだということがあって、先ほどの色々



な機能をシャッフルしていく、みたいなことの中に、松戸の場合は歴史的な資源だとか、公共の公的な公有地のような資源、大学といった資源をシャッフルしていくイメージがあるのかなと思います。そういうことをやっていく時に、公共空間というのが松戸の場合、公園だとか川だとか、街路にも色々な魅力的なものがありますし、公共空間にポテンシャルがあると思うのです。

岡本さんはお仕事の中で、色々な機能をシャッフルしながら公共空間を使って、さきほど仰ったような色々な人のシャッフルというものを、「wish」の交換を作る例というものは、何か松戸に活かせるようなポイントがあったりしますか。

岡本 我々は全体的に見ると公立の図書館、美術館、博物館、ミュージアム、文化施設を作ることが多いのですが、そういった「公共の文化施設が持っている人を集める力」にはまず注目した方が良いかなと思っています。公共的なものと商業的なもの、民間的なものと、その双方の力が必要で、それは現に世の中を見渡していると、例えば年間百万人が来場する図書館はもはやまれでもない、ごく普通の現象になってきています。よく我々も新しく図書館を建て替えたり、全く新しく図書館を作る時に市民の方にお伝えするのですが、今ある図書館を見て考えないで欲しいです。今ある図書館、建て替えようとしている今ある図書館は、だいたい小さくて、パツとなくて、人が行かないんです。それを見てその発展形＝どうせ大したことないって決めつけないでほしいです。実際に世の中には全く、生まれ変わっていくような公共施設がたくさんあり、思いの外想像しているよりはるかに人が来るようになります。

須賀川のtetteであれば約7万人の市民に対して1年間で70万人が来ています。正直市民の方は最初はそんなに行かない、と仰っていました。どこのまちでも必ずそういう声をかけられます。でも実際今では、tetteに行くことがほぼ日課になっている人たちが出てきている。我々がよくtetteに関して、そこにまちを作ったようなものであるといいます。施設を作ったというよりは、人が行き交うまちを作る。そういう公共施設が持っている力というものを今一度信じて欲しいです。それを信じるか信じないかでまちづくりの考え方は変わってくると思います。



特に松戸は結構な都会です。ですから都会の中で公共施設でやるべきことと、やる必要がないことをきちんと区別する必要がきつとあって、これは民間の商業的な取り組みでできる部分も十分あると思います。他方、それこそ税金を使って松戸の市民みんなのものとしてやらなきゃいけないよね、というものもあるはずで、そこを「松戸市らしさってことを考えてどう見分けていくか」、ここはすごく大事なことです。かつこの答えを知っているのは市民の方で、市民の方にとってこれはやはり、このまちに暮らしていく上で欠かせないものはこれだ、ということは住んでいる方にしかわからない。

それを他所のまちがどうこうということに流されるのではなく、まさに2050年ですよ、このまちにあと30年住み続けたい、あるいは30年後に自分の子供や孫に引き渡していくためには、ここに何を埋め込んで行かなくてはいけないのかってことを、既成概念に縛られたり、今あるものに縛られるのではなく、少し未来を見渡す目を持って、こんなことがしたいあんなことがしたい、そしてそのためには何が必要かを考えてもらう。それが大事かなと思います。

藤村 最近の公共施設はものすごくパワフルになってきて、例えば愛知県の岡崎市でも「図書館交流プラザ りぶら」という場所があります。そこに年間150万人集まる。ただ、150万人来た人が地下の駐車場に停めて、図書館で一日過ごしてそのまま帰ってしまう。その人達がどうやってまちに出て行くか、どうやってまちの中で過ごしてもらうかということが課題になっている。そういう建築＝ハコモノとまちの関係とか、どうやってその日そこに集まった人がそのまちに、商業的な活性、経済的な活性に繋げていくかということに関しては何かお考えがありますでしょうか。



岡本 我々はよく施設づくりに関わる時に、その箱だけに人が来てもしようがない、まちに繋がらなさいいけないということをすごくお伝えするんです。それをどう構造にしていこうかということは、非常に重要なポイントになっています。我々もいくつかこだわるポイントがあって、ひとつは駐車場の問題です。車社会の問題とも言えますけれど、これは松戸の場合は特に、市民の方もお分

かりになるとは思います、車の利便性と少し距離を置いて欲しいと感じます。

松戸は車が無くても、ちょっとした移動は何とでもなります。十分鉄道網が発達している、それは首都圏でも比較的稀有(けう)なまちのひとつと言っていると思うのです。そもそも走ってる電車の路線数が多い。基幹駅が多い。これに関して言うと松戸は東葛エリアでも近隣自治体の中でもひとつ抜きん出た存在になっていると言っているはず。何か施設があって、それがまち全体に繋がってまち全体の活気となるためには、「歩く人を増やす」ということにもはや尽きると思います。

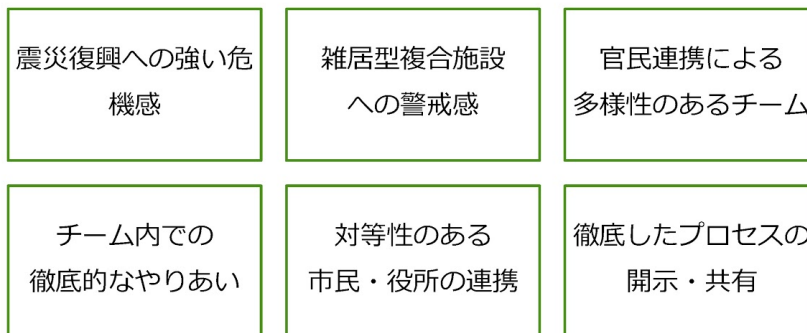
これはどちらかというアメリカ型のまちづくりなのか、特に近年意識して取り組まれてるようなヨーロッパ型のまちづくりになると思いますが、やはり歩けるまちにしない限りまちの未来はないですよ。特に地方都市で車へのこだわりが強くなるのは分からなくはないです。それはそれで課題なのですが、松戸は明らかに大都会であって、少々陰りはあるかもしれませんが、とはいっても伸びて行くまちのひとつであることは間違いない。その時に駅前まで車で行って便利なまちってところに目を移してしまうのではなく、駅周辺までは車で出ても構わないでしょう、でもそこからどこかに車を停めて、後は歩いて楽しめるという贅沢さがあるまち。本当に車を使う必要がある人、例えば高齢者の方とか障害をお持ちの方のためにも必要ですけど、お元気な方からすると歩いても楽しいまち、ということを意識していくことが、まずひとつ重要だろうと思います。

それは同時に、まちづくり、ひとにやさしいまちづくりに大きく関わると思っていて、我々は同じような事を、車がないと生きていけない地方都市でもはっきり言います。なぜならば「車を前提としないまちづくりをするということは18歳以下、そしてシニアにとって優しいまち」になるのです。特にまちの存続を考えると、これは地方都市に対してはすごく強く言うのですが、「18歳までを大切にすまちづくりをしない限り、若者はその土地を捨てることは間違いないわけで、地域に対して想いを持ってない・愛着を持ってないようなまちづくりをする、つまり18歳以下の免許を持ってない子供か

らしたら親の送迎がなければ何の活動もできないまちに子供は残るわけがない」ですよ。そこはやはりまちに愛着を持ってほしい。と考えるとやはり歩けるまちづくりをしていく。

arg

tetteを生み出したもの



学問を生かす社会へ

Copyright アカデミック・リソース・ガイド株式会社 (arg) All Rights Reserved.

もうひとつ別の点で言うと、これも難しいところはあると思うのですが、松戸はやはり千葉県のまちなので、そこに私は松戸らしさを発揮してほしいなと思っています。つまり東京側に寄らない、ということ。さきほどの商業施設のお話でもそうですけれど、東京にあるものが出てきて嬉しいという方向にあまりなびきすぎると、まちの個性は失われます。仰ったとおり歴史も文化もある松戸、だからこそあってほしい商業施設や、あってほしいお店があるはずだと思います。それは実際、私も松戸を今まで結構よく歩いていますが、松戸にしかないものはちゃんとあるんですよ。よそからわざわざ人が松戸に来ようと思うには、そういうものがが必要です。

今、駅前の環境などがドラスティック(=抜本的)に変わってきていますが、そういうものがなくなること、つまりかつての東京が周辺都市に発展してくる中で松戸にできたものが無くなるのが本当に悲しむことなのか。実は今松戸らしさを発揮する、そういうタイミングに来ているのではないかと思います。

最近我々も松戸、柏、成田、東庄などこの沿線で仕事してるのですが来るたびに面白い。来るたびにまちのカラーが違う。これは横浜や川崎のような大都市には見られない、言ってみれば東京の多摩地域に近い面白さがあるんですよ。それをもっと地域の方には大事にしてほしいなと思います。それがこれからのまちづくりにおいて、松戸にとって私はヒントになるのではないかなと思います。